西洋文学この百冊

京都大学文学部西洋文化学系編

はじめに

あらゆる文学作品は人として生きる喜びや悲しみ、苦しみの中から生まれてきたように思われる。「歌というのは声を長く引く意味で、人は喜ぶとこれを声に出し、声に出して足らないから長く引く。長く引いて、なお足らないときは嗟歎し、嗟歎してなお足らないときには、手の舞い足の踏むところを知らないのだ」と中国古代の楽官は言う（司馬遷『史記』楽書第二）。ギリシア人も音楽の起源を三種類のものに認め、悲しみは自ずから嘆きに転じて歌となり、喜びは手拍子足の踊りを促すか、さもなくば韻律とメロディを備えた歌を歌わせ、神憑りは韻文で常ならぬ詩句を口走らせる、とした上で、恋の恍惚はこの三つをも越えると考えた（プルタルコス『食卓歓談集』）。アイヌの情歌・恋歌は Yaikatekar というが、ヤイは自身、カテカルは「憑く、異常意識に入れる」という意味であるから、ヤイカテカルで「物に憑かれて正心を失いうつけになること、恋をすること、そして常規を逸したことを表白すること」を表し、歌そのものをも指すことになるのだそうである（金田一京助『ユーカラ概説』）。

これを下世話に言えば、貧の盗みに恋の歌、ということになろうか。自然の赴くところ、人は貧乏をすれば盗みに走り、恋をきっかけにして詩人になる。そして韻文では尽くせぬ複雑な思いは、散文を用いて綿々と綴る。

悲しさ、苦しさが溢れて手に負えなくなった時、これを歌い、あるいは書くことによって救われようとする人がいる一方で、それを読んで慰められる人もいる。人は死体を見ると吐き気を催すのに、よく描かれた死体の絵を喜ぶという（アリストテレス『詩学』）。苦しさについても、自らこれを経験するのは避けたいが、よく構想された苦悩の物語は快くさえある。

こうして、書く人と読む人、われわれと見ぬ世の人を引き会わせるのが文学の大きな働きではないかと筆者などは考えてきたが、その文学が最近はあまり読まれなくなっているという。確かに、一九六〇年頃から暫くの間、各種の世界文学全集・日本文学全集が競って出され書店の棚を埋めていたが、今はそのようなことはない。ドイツ語のゲーテ全集を常に棚に備えている洋書店も、今では日本で数軒しかなくなったとも聞いている。

文学が読まれなくなったのには様々な理由があろうが、文学全集が姿を消し、文庫の種類ばかりが徒に増えた今日、どこへ行けば上質の文学に会えるかが分かりにくいという状況もあろう。西洋文学の教育を担うわれわれがここに『西洋文学この百冊』と題する小冊子を編むのは、ひとつには、若い人たちに広く古今の名作に親しんでもらいたいから、ひとつには、われわれが学生の頃に薦められた作品と今われわれが勧めるものとがどのように変わってきたか、それを確認したいためもある。百冊という数は多いか少ないか。文学部に専任教官のいる各国文学から一三ないし一六点を挙げ、近代文学の理解には必須の聖書とギリシア神話にも触れ、なお世界文学史から逸することのできない数冊を付した。見出しにはできるだけ今も手に入る書物を掲げたが、絶版品切れ書も図書館と古本屋で探し出せるし、教官研究室を訪ねて借りるのもよいだろう。

稲垣浩監督、三船敏郎主演の『或る剣豪の生涯』（一九五九年）という映画がある。ホセ・ファーラーの

『シラノ・ド・ベルジュラック』(一九五〇年)も痛快にして悲痛であったが、これもよくできた翻案だった。駒木兵八郎は剣の達人である上、枯れることない詞藻にも恵まれていたが、巨大な鼻を恥じて幼時より慕う千代姫に想いを打ち明けることができない。一方、美剣士の十郎太も同じ姫に恋するものの、こちらは歌も詠めず懸想文のひとつも書けない。兵八郎が十郎太のために恋の取り持ちとなり、夜の庭木の陰から声色を使って想いのたけを述べるのを、明かり窓の向こうで千代姫がうっとりと聞き惚れるのを見る時、この映画はよくぞ文学の力を称揚してくれたと、筆者などは快哉を叫んだものである。しかしながら、兵八郎は歌の力で千代姫と結ばれたわけでも、大身に上がったわけでもない。所詮文学は無力なのか。泰西の詩人も「やさしい詩句より、りっぱな贈り物の方がご婦人には歓ばれる」と歌っている(オウィディウス『恋の手ほどき』)。しかし、しかし、「人に歌を読ふでかけられて、其返歌をせねば、先の世で口ない虫に生るる」ともいう。せめて次の世でも人と生まれるように、この世で文学にたしなんでおきたいものである。

(中務哲郎)

書物の森のなかへ

みなさんのなかには、まだ文学部閲覧室の書庫に入ったことがない、という人がいるかもしれない。そんな人のためにひとこと言っておくと、それは一生の損である。

もちろん、調べものをしていて、ある書物を探すために書庫に入ることもかまわない。しかし、わたしがここでおすすめしたいのは、特にこれという目的もなく、ぶらりと書庫に入ってみることだ。

樹海に迷い込んだような書物の森のなかを、あてもなく散策してみること。空調で大幅に希釈されているのは仕方ないが、それでもかすかな書物の匂いを吸い込んでみること。そして、どういうわけか立ちどまり、つい手が伸びてある一冊の書物をつかみだす、その指先の感覚を味わってみること。簡単に言ってしまえば、文学部で学ぶということは、この本をつかみだす指先の感覚を鍛えることに他ならないからだ。

あなたが数あるなかから偶然につかみだした書物は、とても古くて、先人の鉛筆による判読できないような書き込みやら下線やらがいっぱいあるかもしれない。それをけっして嫌がらないことだ。あなたがその本を手にした瞬間に、あなたとそのいつの時代か知れない先人とは、本を仲介にして交歓するのだから。ひょっとしたら、わたしもいつか文学部をやめるときに、蔵書を引き取ってもらうことがあるかもしれない。それが書庫に並べられて、百年先の読者をじっと暗がりのなかで待っているかと思うと、わたしの読書人生もまったくの無意味ではないかもしれないという気がしてくる。

あなたがつかみだした本に貼られている、貸出票を眺めてみよう。そこに記録されているのは、その本の上を通り過ぎた視線の数だ。そして今、あなたの視線も、そのいくたびかの視線と交わる。

わたしがかつて前任校の神戸大学に勤めていたころ、書庫の本にはすべて、過去に借り出した人間の名前まで書いたカードがはさまれていた。そして、わたしが借り出す本にはどれも、ある同じ名前がカードに書いてあった。要するに、わたしが読みたいと思った本は、ある人が前に全部読んでいるのだった。わたしはそこに記されていた「池内紀」という名前をしっかりと記憶にとどめた。それ以来、わたしは池内さんが書くエッセイの大ファンである。かつては池内さんと同じ本を――それもまさしく同じ本を――何冊も読んだことがあるというだけで嬉しくなる。この気持ち、わかってもらえるだろうか。

その逆に、あなたがつかみだした本は、貸出票も貼られていなくて、もしかしたらまだだれも読んだことのない本かもしれない。つまり、あなたが初めての読者になるわけだ。そういう本に出会ったら、もちろん大切にして読もう。

わたしが旧教養部に勤めていたころ、そこの英語教室の書庫には、『タイム・マシン』で名高いH・G・ウェルズのアトランティック版著作集全二十八巻が置かれていた。これは一六七〇部の限定版であり、ウェルズ自身のサインでナンバーが入っている。まあとびきりの稀覯本というわけではないにしろ、やはりそこそこの値打ち本である。そこに収められているある長篇小説が読みたくて、その巻を手に取ったら、なんと驚いたことに、まだだれにも読まれていない本だった。そんなことがどうしてわかったのか、と思う人もいるかもしれない。実を言うと、この著作集は四ページずつ綴じて製本されていて、わたしが手に取った巻はそれがまだカットされていなかったのである。ペーパーナイフという洒落た道具は持っていなかったので、果物ナイフか何かで切ったような記憶があるが、そのときにはなんとも表現できない気持ちになったものだ。

宝の山のようなウェルズの著作集が、それまでずっとだれにも読まれずに書庫で眠っていたとは！　京大の先生たちも、あんがい本を読まない人間ばかりだなあ、と思ったりもした。

それはともかく、昔は書庫の薄暗がりのなかで一冊の書物を引き当てることが勉強だった。それが今では、インターネットで新本や古本のデータベースを検索するのが指先の訓練になっている。たしかに、そうした検索は無駄がなく、すぐに目的の本を見つけられるかもしれない。しかし、書庫にあふれる書物の森をさまよってみるという体験なしには、およそ文学というものは成立しないのではないかと思う。どんなに古い本であれ、本たちは生きている。書庫のなかでひっそりと息をひそめ、未来の読者を夢見ながら眠っている。そう、ちょうど眠れる森の美女が、王子様の出現を待ちわびているように。

さあ、手を伸ばそう。まるで偶然の出会いのように見えるが、実は運命に導かれた出会いでしかない、今あなたの目の前に現れた一冊の本に。

（若島正）

さらに読み進めたい人のために

この冊子は、京都大学文学部に新たに入学してきた人達を念頭に置き、西洋の文学に親しんでもらうための指針として作成した。ただしさらに上の学年の人達にも役立ててもらえればとも思う。このリストを一覧して皆さんの抱く感想はどうだろうか。ほとんどどの本も読んだことがないという人もいるだろう。そういう人は喜ぶといい。西洋文学の豊かな広大な世界が、未知のまま待ち受けてくれているのだから。このリストのうちのどれでもいい。まずは興味が持てそうなものから読みはじめてほしい。一方なかにはここに挙げてある本のかなりの数をもう読んでしまったという人もいるかもしれない。しかしそういう人であっても何冊かは新しい発見があるはずだ。このリストを作るにあたっては、これはぜひ読んでおいてほしいという名作を選ぶと共に、まだ古典とはみなされていない作品でこれはおもしろいという作品も紹介しようとしたのだから。いずれにしても、ここに挙げた百冊以外のものもさらに読んでみたいという人が出てくるだろう。そういう人にさらなる指針として次のような本を紹介しておこう。

西洋文学の定評ある名作を集めた書物として、その呼び名は様々だが世界文学全集というものがある。すでに読んでおもしろいと感じた作家のものが載っている巻、あるいはつながりのある作家の作品を収めた巻などから読みはじめるとよかろう。現在新刊書店で入手できるものとしては、新潮社の「新潮世界文学」、中央公論社の「世界の文学セレクション」、集英社の「ギャラリー世界の文学」がある。こうした全集はよほど大きな書店でないとすべては棚に並んでいない。その場合は何らかの方法で各巻の内容を調べて注文するとよい。大学の図書館にも世界文学全集はそろっている。付属図書館の開架コーナーには、前記の新潮社と集英社のものに加え、筑摩書房の新旧二つの版の「世界文学大系」および「世界古典文学全集」が並んでいる。主だった作家の個人全集も数多く並べられているので、どういうものがあるかゆっくり見てほしい。総合人間学部図書館には、筑摩書房の「世界文学大系」の他、中央公論社の「世界の文学」、集英社の「世界の文学」と「二十世紀の文学」、白水社の「新しい世界の文学」等が並んでいる。開架されていないものとして、河出書房の「世界文学全集」もある。この他にも領域を限定した全集が、開架閉架を問わず収められているので調べてみてほしい。文学部の図書室にはこの種の本は並んでいない。専門的研究のための図書室という性格が強いためだ。ただし書庫に収められている洋書の原書は、質が高く数も多い。語学をよく学んで、いずれこういう書物も自由に読めるようになってほしい。洋書について言えば、これまでに身についている英語の知識を生かして、英語の作品や英語に訳された作品なども読んでみてはどうだろうか。ペーパーバックは比較的手に入れやすいから。

文庫本は西洋文学の翻訳の宝庫だ。廉価で持ち運びにも便利なので自分で買うのをお薦めする。古典的名作が多数手に入る文庫として知られるのが岩波文庫。この文庫に関しては、品切れ、絶版のものも京大の各図書館に収められている。新潮文庫にも外国文学の翻訳がよく揃っている。この他、講談社文芸文庫、ちくま文庫、中公文庫、ハヤカワ文庫、角川文庫、河出文庫、集英社文庫ならびに新書版の白水社のUブックスなどに欧米の文学の翻訳がある。文庫本の棚は一見同じように見えるが、書店によって置いてある本には特色があり、よく調べると意外な本が見つかることもある。各文庫ごとの解説目録も参考になる。最近は文庫本でも品切れになりやすい傾向があるので、書店にこまめに足を運ぶといい。最新

の作品の翻訳をはじめ、文庫や文学全集ではなく単行本でしか手に入らないものも多い。そういう本が置いてあるコーナーにも注目してほしい。

以上紹介した膨大な本のなかから、ではいったいこの冊子で紹介した以外のどういう本をさらに選んで読めばいいのか。そのための案内をつとめてくれる書物を以下に列挙しておくので参照してほしい。

西洋古典文学に関しては、『ギリシア文学を学ぶ人のために』(松本仁助、岡道男、中務哲郎編、世界思想社)と『ラテン文学を学ぶ人のために』(松本仁助、岡道男、中務哲郎編、世界思想社)が参考になる。さらにボナールの『ギリシア文明史』全三巻(岡道男、田中千春訳、人文書院)も古代ギリシアの文明を知るための基本的な書物として挙げておく。

スラブ諸国の文学のうちロシアに関しては『ロシア文学史』(川端香男里編、東京大学出版会)が包括的。『新版ロシア文学案内』(藤沼貴、小野理子、安岡治子著、岩波文庫)は入手しやすく、簡潔に整理されている。本格的に取り組む人には『はじめて学ぶロシア文学史』(藤沼貴、井桁貞義、水野忠夫編、ミネルヴァ書房)を薦めたい。最新の研究成果を踏まえ、代表的作品の名場面が露日対訳で紹介されている。

ドイツ文学に関しては、『増補ドイツ文学案内』(手塚富雄、神品芳夫著、岩波文庫)と『ドイツ文学史』(藤本淳雄他著、東京大学出版会)がドイツ文学の主な作品を知るのに役立つ。また『ドイツ文学案内』(岡田朝雄、リンケ珠子著、朝日出版社)は個々の作品についての説明や資料が詳しい。もう一冊『ドイツ文学を学ぶ人のために』(深見茂編、世界思想社)も挙げておこう。

イギリス文学に関しては、日本語の総合的な辞典として研究社英米文学辞典(第三版)があるが、これよりはかなり廉価なペーパーバックの Margaret Drabble & Jenny Stringer, The Concise Oxford Companion to English Literature を薦めたい。

アメリカ文学に関しても、同じシリーズの James David Hart, The Concise Oxford Companion to American Literature が薦められる。また『アメリカ文学のレッスン』(柴田元幸著、講談社現代新書)は、アメリカ文学のエッセンスを独自の切り口で紹介する絶好の入門書。『アメリカ文学史講義』全三巻(亀井俊介著、南雲堂)もお薦め。特に第二巻『自然と文明の争い——金めっき時代から一九二〇年代まで』が。

フランス文学に関しては、『増補フランス文学案内』(渡辺一夫、鈴木力衛著、岩波文庫)や『フランス文学を学ぶ人のために』(田辺保編、世界思想社)が参考になる。『フランス文学史』(饗庭孝男他著、白水社)と『フランス文学史』(田村毅、塩川徹也編、東京大学出版会)もフランス文学の流れを知るのに役立つ。さらに詳しく知りたい場合は、六巻から成る『フランス文学講座』(福井芳男他編、大修館書店)も繙くといい。そしてもう一冊、フランス文化についての基本図書、デュビィ、マンドルー共著の『フランス文化史』全三巻(前川貞次郎他訳、人文書院)も紹介しておきたい。

イタリア文学に関しては、『イタリア文学史』(岩倉具忠、清水純一他著、東京大学出版会)を参考にしてほしい。イタリア文学にきわめて関係の深いわが国の作品として、須賀敦子の随筆(河出書房)および塩野七生による一連の歴史小説(中公文庫)も挙げておこう。

文学事典の類も上手に利用するとずいぶん役立つ。六巻本の『世界文学大事典』(集英社)が代表的なものだが、他に『新潮世界文学辞典』(新潮社)もある。これらは図書館の参考図書コーナーで見るとよい。

新刊書店の場所や品ぞろえについては、生活しているうちに徐々にわかってくるものだが、一冊便利な本があるので紹介しておく。『関西ブックマップ』(創元社)というのがその書名だ。この本には古書店も

紹介されている。文庫本など広く出回った本の場合には、新刊書店では手に入らなくても、古書店では簡単に見つかるものも多い。特に探している本がなくても、古本屋めぐりは知の世界が広がる思いがして楽しいものだ。やってみてほしい。前記のガイドブックの他、京都に関しては『京都古書店巡り』(京都府古書籍商業協同組合)が、全国の古書店については『全国古本屋地図』(日本古書通信社)が役立つ。ちなみに筆者は、旅をする際この『全国古本屋地図』を大いに参考にしている。最近はパソコンを使っての古書探索も普及している。主なウェッブサイトとして、インターネット古書店案内(www.murasakishikibu.co.jp/oldbook/index.html)、日本の古本屋(www.kosho.or.jp)、Easy Seek(www.easyseek.net/)がある。

最後に筆者の経験に基づくアドバイスを一言。私が学生生活を送った今から三十数年前、文庫本の種類は今よりはるかに少なかったものの、当時文庫本と言えば定評ある古典的作品を収録するという傾向が強かったため、外国文学の名作の翻訳書の数はむしろ多かった。しかも世界文学全集の類が各社から競って発行されていた時期でもあった。そういう恵まれた状況のなかで、私は次々に読みあさった。知らない作品を前にして胸がときめき、一作読みおえるごとに世界が広がり深まるのを覚えた。仕事柄今でも私は外国の文学を読みはする。若いころとは違う読み方もできていると思う。しかし昔のあの感激を味わうことは少なくなった。どうやら世界の名作には読むにふさわしい時期があるようだ。今のあなたの年頃、それがちょうどその時期なのだ。そしてその時期はいつまでも続くわけではない。どうだろう。この冊子を手がかりに、早速本選びを始めてみては。

(西村雅樹)

推薦書目一覧

『舊新約聖書』　（日本聖書協会）

聖書は西洋文化を理解するために必読の文献。説教は嫌だと敬遠する必要などない。サムエル前書にあるダビデの人間臭い物語など、特に旧約聖書には面白いお話が多い。知的興奮を求める向きはヨブ記を是非お試しあれ。手に入れやすいのは新共同訳だが、同じ読むなら格調高い文語訳で。（佐々木徹）

『ギリシア神話』

呉茂一著　（新潮文庫（上・下））

西洋の文学や美術の理解にはギリシア神話の知識が不可欠だが、「ギリシア神話」という聖典が存在するわけではなく、学者が諸種の古代文献から物語を再構成するのである。古典の専門家の手になり内容豊富なものとして標記の書を推す。理論書としてはG・S・カーク『ギリシア神話の本質』（法政大出版）がよい。（中務哲郎）

『イリアス』

ホメロス ; 松平千秋訳　（岩波文庫（上・下））

トロイア戦争の最大の英雄アキレウスは総大将に侮辱されて戦列を離れる。ギリシア軍は窮地に陥り、身代わりに立った親友パトロクロスも敵将ヘクトルに倒される。アキレウスの怒りは今やヘクトルに向けられ、壮絶な復讐が果たされる。戦いと友情、死へと定められた人間の誉れを謳いあげた叙事詩の最高傑作。（中務哲郎）

『ギリシア・ローマ抒情詩選 : 花冠』

呉茂一訳　（岩波文庫）

ギリシアからはアルキロコスはじめ七人の詩人、ローマからはカトゥルス、ホラティウス、プロペルティウスの秀歌を訳出した貴重なアンソロジー。「すず川のほとり　からなしの　枝を鳴らして　風そよぎ　渡りゆく・・」（サッポー）は愛誦に値する。墓碑・恋愛詩・献詩やエジプトの詩、中世ラテン詩を付す。（中務哲郎）

『オイディプース王』 ギリシア悲劇全集 3

ソポクレース ; 岡道男訳　（岩波書店）

テーバイの国を襲う悪疫の原因を神託に問うと先王ラーイオス殺害の穢れの故だという。オイディプースは犯人探索に乗り出すが、次第に明らかになるのは父親を殺し実の母と結婚しているという己れの正体であった。オイディプースは穢れ人か高貴な魂か。ギリシア悲劇ではエウリーピデース『メーデイア』も名作。（中務哲郎）

『歴史』

ヘロドトス ; 松平千秋訳　（岩波文庫（全 3 冊））

ギリシア人とペルシア人の戦争の原因を究明すると序文で謳いながら、「歴史の父」の筆は脱線に次ぐ脱線で止まるところを知らず、バビロニア・エジプト・ペルシア・スキュティア等の古史と民族誌を含む全世

界史を書き上げてしまう。歴史性・宗教性・物語性に富み、司馬遷『史記』と並ぶ歴史書の傑作である。（中務哲郎）

『饗宴』　プラトン全集 5
プラトン ； 鈴木照雄訳　　（岩波書店）
　前四一六年、悲劇コンテストで優勝したアガトンを祝う宴に集まった友人達は、エロスを讃美する演説を競う。今の人間は大昔の男男・男女・女女人間が両断されたもので、昔の片割れを恋い求めるのがエロスだとするアリストパネスの説は有名。美青年アルキビアデスがソクラテスに色仕掛けで迫り失敗する話も。（中務哲郎）

『アナバシス ： 敵中横断 6000 キロ』
クセノポン ； 松平千秋訳　（岩波文庫）
　キュロス王子は兄のペルシア大王に対して謀反の軍を興すがバビロンを目前に戦死、敵地に残されたギリシア人傭兵一万は雪のアルメニア山地を超えて脱出を試みる。退却を指揮したクセノポンによる迫真のドキュメンタリー。「ギリシア文学がこの一作しか残っていなくてもギリシア語は学ぶに値する」（ギッシング）（中務哲郎）

『ダフニスとクロエー』
ロンゴス ； 松平千秋訳　　（岩波文庫）
　捨子のダフニスとクロエーは牧人として育てられるが、二人の間にいつしか芽生えた恋は、レスボス島の美しい自然の中で四季の巡りと共に育っていく。恋をした人には思い出を甦らせ、恋知らぬ人には手引きともなれかしと作者はこの物語を書いた。ゲーテ『ヘルマンとドロテーア』、三島『潮騒』等の原型でもある。（中務哲郎）

『ほら吹き兵士 他』　ローマ喜劇集 3
プラウトゥス ； 木村健治他訳　　（京都大学学術出版会西洋古典叢書）
　頑固な父親に放蕩息子、策略に富む奴隷に強欲な遊女屋の主人、また、腕力と金はあるが単細胞の兵士など、類型的な登場人物が繰り広げるローマ喜劇の笑いは、いわば、古代の松竹新喜劇を見るよう。そこにはまた、日常性の破壊、あるいは、メタ演劇的要素など現代的感覚があふれる。（高橋宏幸）

『国家について』　キケロー選集 8
キケロー ； 岡道男訳　　（岩波書店）
　個人の利益や名誉を越えて社会が健全に機能し、繁栄を持続するために、いかなる政体、制度が定め置かれるべきかを問う書。ローマ最大の文人が歴史を振り返りつつ、「永遠のローマ」の理念を提起する。第六巻には魂の不死を説いて名高い「スキーピオーの夢」を含む。『法律について』を併録。（高橋宏幸）

『アエネーイス』
ウェルギリウス ; 岡道男・高橋宏幸訳（京都大学学術出版会西洋古典叢書）
陥落したトロイアを脱出した英雄アエネーアスがイタリアに渡り、ローマの礎石を置くまでを描く叙事詩。なぜ正しい人間が多大な苦難を蒙るのか、なぜ人は人を殺すのか、その報いはいかにあるべきか、古代ローマ最大の詩人は人間社会の根源的問いをわれわれに突きつける。（高橋宏幸）

『アリストテレース詩学・ホラーティウス詩論』
松本仁助・岡道男訳　　（岩波文庫）
本書は古代の文芸論の代表作二編を収めるが、とりわけ、ホラーティウス詩論は詩的表現の適正さをめぐってユーモアたっぷりに綴られた書簡詩。均整と統一に戯れを混ぜて、詩作の喜び、味わう快を披瀝する。「事件の核心へ」「あまりに用心深く嵐を恐れる者は地面を這うほかない」など引用句も多数。（高橋宏幸）

『変身物語』
オウィディウス ; 中村善也訳　　（岩波文庫（上・下））
ローマで最も饒舌な詩人がギリシア・ローマ神話を題材に天地創造からカエサルの時代までを十五巻の叙事詩に綴ってみせた書。大小様々な不思議の物語は想像力を刺激してやまず、古来、芸術家の霊感の源泉。その言葉が描き出す情景はさながら古代のSFX、あるいは、それ以上とも思われる。（高橋宏幸）

『サテュリコン』
ペトローニウス ; 國原吉之助訳　　（岩波文庫）
「趣味の審判」としてローマ皇帝ネロに優雅な技芸に関する助言を行ったペトロニウスによる小説。醜悪の極みの向こうまで突き抜けるように時代の爛熟を描く筆致は読む者の目を瞠らせる。作品は断片でしか伝わらないため「トリマルキオの饗宴」ばかり有名だが、そこには「芸術とは何か」への問いかけがある。（高橋宏幸）

『青銅の騎士』
アレクサンドル・プーシキン ; 郡伸也訳　（群像社ロシア名作ライブラリー）
「ロシア国民文学の父」と呼ばれるプーシキン（1799－1837）の代表作。首都ペテルブルグを襲った洪水で婚約者を失った下級官吏が、この街を強引に建設したピョートル大帝の記念像に戦いを挑み、敗滅するまでを描いた物語詩。専制と苛酷な自然に翻弄される「小さな人間」を描くロシア文学の伝統の出発点となった作品と言われている。（中村唯史）

『鼻／外套／査察官』
ニコライ・ゴーゴリ ; 浦雅春訳　（光文社古典新訳文庫）
19 世紀前半を代表する作家ゴーゴリ（1809－52）の代表作 3 編。近代化する社会の現実感の

希薄さを首都に託して描く「ペテルブルグ神話」の傑作と言われている。高価な外套を奪われて憤死した男の幽霊や、自分の鼻に社会的地位を奪われかける男の物語を饒舌体で描いた作品群は、ロシア文学の一面である幻想と諧謔に満ちている。（中村唯史）

『猟人日記』
イヴァン・ツルゲーネフ；中山省三郎訳　（角川文庫［上・下］）
　ロシアの民衆の人間性を繊細な自然描写の中に描き出したツルゲーネフ（1818－83）初期の連作短編。当時の皇太子アレクサンドル 2 世にも感銘を与え、1861 年の農奴解放の一因となったとも言われている。明治の文豪二葉亭四迷がこの連作中の数編を和訳する中から言文一致体を生みだしたことにより、近代日本文学の成立にも影響を与えた。（中村唯史）

『罪と罰』
フョードル・ドストエフスキー；工藤精一郎訳　（新潮文庫［上・下］）
　天才は正しい目的のためなら殺人も許されるというテーゼの下に金貸しの老婆を殺した主人公の彷徨と苦悩というストーリーはあまりにも有名だ。だが、主人公がまだ 20 歳代前半の若者であること、作品に混乱した当時の世相をジャーナリスティックに反映していることなども注目に価しよう。多様な読みの可能性を内包したドストエフスキー（1821－81）の代表作。（中村唯史）

『アンナ・カレーニナ』
レフ・トルストイ；望月哲男訳　（光文社古典新訳文庫［(1) －（4)］）
　不倫に陥った貴夫人アンナの破滅までと、土に根ざして生きることを決意するまでの地主貴族リョーヴィンの模索という二つの運命の交差を軸として、ロシア上流社会を多面的に描きだした長編。繊細な人間観察が作中の随所に現れている。晩年は厳格な宗教思想で自分を縛った作者トルストイ（1828－1910）は、実は生来、過敏なまでの感覚と心理の持ち主だった。（中村唯史）

『桜の園・三人姉妹』
アントン・チェーホフ；神西清訳　（新潮文庫）
　世紀末の小説家・劇作家チェーホフ（1860－1904）の晩年の戯曲 2 編。滅びゆく古き良き時代への挽歌として叙情的な側面が強調されることの多いチェーホフだが、それでは彼がしばしば自作を「喜劇」と呼んだ理由が説明できない。最近ではディスコミュニケーションやグロテスクなど、20 世紀不条理劇の先駆と評価されるチェーホフ劇を作家神西清の名訳で。（中村唯史）

『イワン・デニーソヴィチの一日』
アレクサンドル・ソルジェニーツィン ； 木村浩訳（新潮文庫）
　ノーベル賞作家ソルジェニーツィン（1918～）の出発点となった中編。五十年代初め、旧ソヴェトの収容所でのある一日の生活を細部にわたり淡々と語る。「こんな日が、彼の刑期のはじめから終わりまでに、三千六百五十三日あった。閏年のために、三日のおまけがついたのだ……」という結びの言葉が私には心

に沁みます。(佐藤昭裕)

『われら』
エフゲーニー・ザミャーチン；川端香男里訳　(岩波文庫)
　ザミャーチン(1884－1937)は多様な実験的小説を試みたロシア／ソ連のモダニズム作家。生殖も思想も中央権力の管理下にある近未来社会で、感情を持たず理性だけの模範的市民として生きてきた男が、獲得した感情を再び奪われるまで。アンチ・ユートピア小説の先駆とされているが、主人公の手記の体裁を取ったその語り口は『アルジャーノンに花束を』も連想させる。(中村唯史)

『巨匠とマルガリータ』
ミハイル・ブルガーコフ；水野忠夫訳　(岩波文庫［上・下］)
　革命後のモスクワに突如出現した悪魔の一党が引き起こすカーニバル的な混乱と、無名の巨匠が描いたピラトとキリストの物語とが時空を超えて交錯する幻想小説。作者ブルガーコフ(1891－1940)がスターリン体制下で発表の当てもなく書き続けた本作は、作中の「原稿は燃えないものだ」という台詞通り、死後 25 年を経て刊行され、センセーションを巻き起こした。(中村唯史)

『私人』
ヨシフ・ブロツキイ；沼野充義訳　(群像社)
　米国に亡命したロシア語詩人ブロツキイ(1940－96)が 1987 年に行ったノーベル文学賞受賞講演の全訳。ロシア文学には、社会批判的なリアリズムの系譜の一方で、現代まで神秘主義的・形而上学的な伝統が脈々と受け継がれている。言語と思想の実体性への確信を語るこの講演に、私たちは商品化する以前の文芸思想の遠いこだまを見いだすだろう。(中村唯史)

『尼僧ヨアンナ』
ヤロスワフ・イヴァシュキェヴィッチ；関口時正訳　(岩波文庫)
　現代ポーランド最大の作家、巨人イヴァシキェヴィチ(1894～1980)の歴史小説。ポーランド旧東方領の一小村の修道院を舞台に尼僧「天使の」ヨアンナに取り憑いた悪魔を祓うために派遣された神父のたたかいの物語。スラブ専修ではこのイヴァシキェヴィチの代表的長編『栄光と称賛』を演習で読んで今年で六年目になる。(佐藤昭裕)

『恐怖の兜』
ヴィクトル・ペレーヴィン；中村唯史訳　(角川書店)
　ディスプレイに向かい、自分たちの存在理由をチャットで語り合い続けるだけの 8 人。言説の網の目に捉えられた彼らの会話は哀切でもあり、日本のヴァーチャル・ポルノからテクノ談義、脱構築まで留まることを知らぬ脱線によって滑稽でもある。ペレーヴィン(1962－)はサブカルの意匠を用いつつ不確実な現代を描いて、若者に支持されたソ連崩壊後最初の流行作家。(中村唯

史）

『星のある生活』
イージー・ヴァイル；栗栖継訳　（恒文社）
　ナチス・ドイツ占領下のプラハで、孤独の中で収容所に送られるのを待つだけの日々を送っていたユダヤ人青年が、ナチスが作り出した価値観を一つ一つ読み換え、異化することで、しだいに生きる意味を取り戻していく。力への抵抗を声高にではなく、詩的な文体でつづったチェコ文学の傑作。私自身にとって、とても大切な１冊です。（中村唯史）

『ドイツ名詩選』
生野幸吉・檜山哲彦編　　（岩波文庫）
　一八世紀から現代にかけてのドイツ語による名詩八二篇を集めた一冊。ドイツ語の原詩と日本語の訳詩が見開きに収められている。習いたての発音でもいい。まずは訳詩を頼りに声に出して読んで、ドイツ語の詩の響きの魅力を感じとってほしい。その響きは、詩と音楽が融合したドイツリートの世界にも通じている。（西村雅樹）

『ファウスト　悲劇第一部』
ヨーハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ ； 手塚富雄訳　（中公文庫））
　ファウストは、16 世紀のドイツに実在したとされる学者で、無限の知識欲と行動欲をみたすために悪魔と契約を結び、地獄堕ちしたという。西洋近代人の原型ともいうべきファウストの救済をこころみたこの作品は、第一部と第二部からなるが、まずは第一部を読んでみてほしい。（松村朋彦）

『青い花』
ノヴァーリス ； 青山隆夫訳　（岩波文庫）
　夢に見た青い花を求めて、青年ハインリヒは旅に出る。この小説は、一人の詩人の成長過程を物語ると同時に、あらゆる知の百科全書的統合をめざす試みでもあった。ノヴァーリスの夭逝によって中断されたこの作品は、その壮大な構想からして、そもそも最初から未完に終わるべく定められていたのかもしれない。（松村朋彦）

『黄金の壺／マドモワゼル・ド・スキュデリ』
Ｅ・Ｔ・Ａ・ホフマン；大島かおり訳　（光文社古典新訳文庫）
　現実と非現実が地続きになる感覚を味わいたければ、ホフマンを読むといい。就活に悩む大学生アンゼルムスが幻想世界に足を踏み入れる『黄金の壺』は入門に最適。世界初の推理小説とも言われる『マドモワゼル・ド・スキュデリ』、音楽家ホフマンが顔を覗かせる『ドン・ファン』『クライスレリアーナ（抄）』を併録。（川島隆）

『水晶　他三篇――石さまざま』
アーダルベルト・シュティフター；手塚富雄・藤村宏訳　（岩波文庫）
　短編集『石さまざま』に描かれた一見穏やかな世界は、じつは死や破壊と隣り合わせで危ういバランスを保っている。《私》が幼い日に体験した理不尽な暴力と、過去に共同体を襲った巨大な災厄とが二重写しになる『みかげ石』など四編と名高い「序文」を収録。残る『電気石』『白雲母』は松籟社の全訳版で読める。（川島隆）

『悲劇の誕生』
フリードリヒ・ニーチェ ； 秋山英夫訳　（岩波文庫）
　二四歳の若さでバーゼル大学古典文献学教授となったニーチェの処女作。アポロ的とディオニュソス的という対立概念によって新しいギリシア像を提示したこの著作は、学界から激しい批判を浴び、ニーチェはアカデミズムを離れることになる。だがこの小さな書物が後代の文学と思想にあたえた影響ははかりしれない。（松村朋彦）

『夢小説・闇への逃走　他１篇』
アルトゥル・シュニッツラー ； 池内紀・武村知子訳（岩波文庫）
　『夢小説』は、キューブリック監督の映画『アイズ・ワイド・シャット』の原作となった作品。一九世紀末ウィーンから現代のニューヨークへと舞台を移しながら、映画が原作の細部を忠実になぞっていることには驚かされる。同時代人フロイトが、自分の分身のようだと評したこの作家の現代性を納得させてくれる一冊。（松村朋彦）

『マルテの手記』
ライナー・マリーア・リルケ ； 松永美穂訳　　（光文社古典新訳文庫）
　詩人として名高いリルケの散文による代表作。異郷の地パリにあって記された手記という体裁をとった作品。マルテは孤独に徹し「見る」ことを学ぼうとする。この小説は読む者に独特の影響を及ぼす。読み進めながら読者は、日頃見過ごしているもの、聞き過ごしているものへの感覚が鋭くなっているのを感じるのだ。（西村雅樹）

『トニオ・クレーゲル ： ヴェニスに死す』
トーマス・マン ； 高橋義孝訳　　（新潮文庫）
　初期トーマス・マンを代表するこの二つの短編小説に共通するモティーフは、芸術家と海だろう。北ドイツの港町に生まれたトニオは、デンマークの海辺で市民性への愛を告白し、ミュンヒェンに住む作家アッシェンバッハは、ヴェニスの海水浴場で美少年タジオの誘惑にとらわれる。マンは終生、海に魅せられた作家だった。（松村朋彦）

『カフカ』 ポケットマスターピース01
フランツ・カフカ ； 多和田葉子・川島隆訳　　（集英社文庫）

多和田葉子訳で生まれ変わった『変身（かわりみ）』、読者の神経を逆なでする問題作『流刑地にて』、晩年の最高傑作『巣穴』、未完の長編『訴訟』など、異色で多彩なラインアップを新訳で。カフカが労災保険局で書いた実務的な文書や、好きな人に宛てた気持ち悪い手紙と併せて読めば、また新しいカフカが見えてくるだろう。（川島隆）

『記憶への旅』 ベンヤミン・コレクション 3
ヴァルター・ベンヤミン ； 浅井健二郎編訳・久保哲司訳 （ちくま学芸文庫）
「ドイツ悲劇の根源」等の著作で知られるベンヤミンのエッセー・小品集。この書物に収められた「ベルリンの幼年時代」、あるいは紀行文「ヴァイマル」を読んでから、旅に出かけこれらの街を訪れたとする。ベンヤミンの記憶を通し、またあなたの記憶を通して、街は忘れがたい重層的な相貌を見せることであろう。（西村雅樹）

『モモ』
ミヒャエル・エンデ ； 大島かおり訳 （岩波少年文庫）
現代文明への警鐘として読まれることの多いこの物語は、ドイツ文学への格好のいざないでもある。素性の知れない不思議な少女、人々から時間を盗みとる灰色の男たち、生成流転する時間の花――こうしたモティーフは、エンデの文学がドイツロマン主義の伝統に根ざしていることを物語っているのだから。（松村朋彦）

『朗読者』
ベルンハルト・シュリンク ； 松永美穂訳 （新潮文庫）
ドイツ文学の作品としては久々に日本でもベストセラー入りしたこの小説には、さまざまな読み方が可能だろう。一五歳の少年と三六歳の女性とのあいだの奇妙で残酷な恋物語として。戦後世代の人間が、ナチズムの経験とどのように向きあうかという問いかけとして。そして、「読むこと」の意味をめぐる寓話として。（松村朋彦）

『カンタベリー物語』
ジェフリー・チョーサー ； 桝井迪夫訳（岩波文庫（全 3 冊））
騎士，粉屋、托鉢僧、免罪符売りなどさまざまな職業の巡礼者がロンドンからカンタベリーへの道中で語った、卑猥で滑稽な話から格調高い物語までを収めたもの。この作品は、中世の人々の生活、考え方をいきいきと描き、当時の文学にありがちな類型的描写を脱しているところに大きな意義がある。（宮内弘）

『ヴェニスの商人』
ウィリアム・シェイクスピア ； 小田島雄志訳 （白水Uブックス）
借金の抵当にヴェニスの商人アントニオの胸の肉を要求するユダヤ人シャイロックと、夫の恩人であるアントニオを救うべく裁判官に変装して現れたポーシャとの緊迫したやり取りで有名な喜劇。他にも、ポー

シャの求婚者による小箱選びや、結婚指輪を巡る騒動など、注目すべき場面は多い。（廣田篤彦）

『ハムレット』
ウィリアム・シェイクスピア ； 松岡和子訳　　（ちくま文庫）
"To be, or not to be" をはじめ多くの名台詞を含む、言わずと知れたシェイクスピアの代表作。復讐を前に逡巡するハムレット、剣戟と復讐の達成、そしてハムレットの死など見所は多い。ハムレットやその恋人オフィーリアは幾多の名優によって演じられてきた。近年でもその人気は衰える事を知らない。（廣田篤彦）

『ソネット集』
ウィリアム・シェイクスピア ； 高松雄一訳　　（岩波文庫）
イタリア起源のソネット（14 行詩）の詩形を用いた一五四編の連作で、シェイクスピアの詩人としての才能が見事に結実した、ソネット文学の傑作である。この謎に満ちた詩集では、詩人と美貌の青年（1-126）と黒い婦人（127～152）とが繰り広げる愛の諸相が、微妙に変化する各人の感情を絡ませながら描き出されている。（宮内弘）

『ガリヴァー旅行記』
ジョナサン・スウィフト ； 中野好夫訳　（岩波文庫）
巨人国と小人国の物語を学級文庫の少年少女名作集で読んだ貴方、驚いちゃあいけません、これはそんな甘い話じゃないんです。鋭い機智で人間の醜さを暴き立てたおそろしい諷刺文学、とでも申しましょうか。第四部など本当にぞっとします。中野好夫の翻訳はまさに名人芸。（佐々木徹）

『悪口学校』
リチャード・ブリンズリー・シェリダン ； 菅泰男訳 （岩波文庫）
シェイクスピア以後の劇作品の中でも群を抜く上演回数を誇る。ロンドンの社交界の欺瞞を風刺しながらも、恋人たちがめでたく結ばれる結末を迎える。特に四幕三場、屏風の後ろに恋人を隠したジョーゼフと、彼女の夫ピーター卿とのやり取りは、英国演劇史上屈指の名場面である。（廣田篤彦）

『対訳ワーズワス詩集』
ウィリアム・ワーズワス ； 山内久明訳　（岩波文庫）
ワーズワスは 19 世紀ロマン派の代表的詩人で、イングランドの湖水地方の自然をこよなく愛し、自然との対話を通じて自己形成を成し遂げた詩人で、日本でも古くから自然派詩人として親しまれてきた。彼の詩はふだん眠っている精神の注意力を目覚めさせ、それを眼前にある世界の美しさに向けさせてくれる力を持つ。（宮内弘）

『嵐が丘』
エミリー・ブロンテ ； 小野寺健訳　　（光文社古典新訳文庫）

イギリスの恋愛小説は淡い。薄味である。スパイスが入っても、オースティンの『高慢と偏見』のようにユーモアが小匙二杯程度と相場が決まっている。しかし、『嵐が丘』は全くの例外。ヨークシャーの荒野を舞台に、現世的とは言えぬ激しい感情が火花を散らす、これはとんでもない小説である。（佐々木徹）

『大いなる遺産』
チャールズ・ディケンズ ； 佐々木徹訳　　（河出文庫）
恋あり、涙あり、笑いあり、犯罪あり――『レ・ミゼラブル』や『モンテ・クリスト伯』と肩を並べることができる大きなイギリス小説がこれ。さらに、『オリヴァー・トウィスト』『荒涼館』『リトル・ドリット』など、ディケンズのメロドラマ（西洋歌舞伎）は楽しく、そして深い。（佐々木徹）

『バラントレーの若殿』
R. L. スティーヴンスン ； 海保眞夫訳　　（岩波文庫）
血沸き肉踊る冒険小説の面白さと心理描写の怖さを兼ね備えた傑作。『宝島』では飽き足らない人に是非読んでほしい。これと同工で、複数の語り手による叙述が物語の興味に大きく寄与している楽しい読み物に、同作者による『ジキル博士とハイド氏』の他、『フランケンシュタイン』『ドラキュラ』『月長石』がある。（佐々木徹）

『若い芸術家の肖像』
ジェイムズ・ジョイス ； 丸谷才一訳　　（新潮文庫）
文学青年向き。家族や宗教よりも自己に忠実であろうとする詩人志望の主人公の悩みと成長を断片的な構成で描く。これにのめり込んだ人は『ユリシーズ』に挑戦して下さい。モダニズムを好む叙情派にはジョイスと同年に生まれたヴァージニア・ウルフの『燈台へ』も奨めたい。（佐々木徹）

『エリオット』
T. S. エリオット ； 深瀬基寛編　　（筑摩叢書）
T. S. エリオットは 20 世紀前半のモダニズムを代表する詩人で、これまでにない革新的な詩法や文体を駆使しながら、機械文明が支配する疲弊した現代社会の一端を描きだし、後の文学者に多大の影響を与えた。代表的な詩の訳と解説とからなる本書はこの難解な詩人を日本に紹介するのに大いに貢献した名著。（宮内弘）

『ゴドーを待ちながら』
サミュエル・ベケット ； 安堂信也・高橋康也訳　（白水社）
いつ来るともわからない、果たして実際に来るのかどうかもわからないゴドーを待ちつづける二人の男。彼らは当てもなく話をし、沈黙し、話し、劇の終わりでもまだ動こうとしない。「演ずる」ものがなくなった世界を表現したかのような問題作。なお、この作品には作者による仏語、英語両版がある。（廣田篤彦）

『緋文字』

ナサニエル・ホーソーン；八木敏雄訳（岩波文庫）

舞台は 17 世紀、植民後まもないボストン…言わずと知れた古典アメリカ小説の傑作だが、これをしみじみ味わえる読者は意外と大人かも。「嗚呼、ヘスターよ！」云々という荘厳すぎるメロドラマに怖気づいた人は、『ホーソーン短篇集』（岩波文庫）をぜひ。なんなんだこの人は？と俄然興味が湧いてくるはず。（森慎一郎）

『白鯨』

ハーマン・メルヴィル ； 八木敏雄訳　（岩波文庫）

傑作海洋冒険小説にして哲学思弁小説、いまさら説明不要の（説明不能の？）アメリカ文学屈指の奇書。この怒涛のパワーをまともに受け止めるなら若いうちに。岩波文庫の八木訳、新潮文庫の田中訳、講談社文芸文庫の千石訳と味のある名訳揃いなので、本屋で冒頭を読み比べて性に合いそうな訳を選ぼう。（森慎一郎）

『対訳ディキンソン詩集』

エミリー・ディキンソン ； 亀井俊介編　（岩波文庫）

19 世紀半ば、アメリカ片田舎の自宅にひっそりと閉じこもり、出版のあてもなく無数の詩を書き綴った。そんな詩人の独り言がいまなお清新に聞こえるのは、その魂との対話の仕方がなんとも魅力的だからだ。「ディキンソンは抽象を感じ取り、感覚を思考する」。後代の詩人による逆説的な評言がしっくりくる。（森慎一郎）

『デイジー・ミラー』

ヘンリー・ジェイムズ；西川正身訳（新潮文庫）

小説を「芸術」に高めたとされるこの作家に親しむなら初期の傑作中篇から。アメリカとヨーロッパの間を揺れる作品世界に浸りつつ、作家の技巧にも思いをめぐらそう。同じ中篇でも異色の『ねじの回転』等を経て、最終的に目指すべきは『大使たち』を初めとする後期三部作の高みだが、階段は一歩ずつ。（森慎一郎）

『ハックルベリー・フィンの冒険』

マーク・トウェイン ； 西田実訳　　（岩波文庫（上・下））

粗野で無邪気なはぐれ者ハック、その文法も綴りも蹴っ散らかした語りがこうも詩的に心に響くのはなぜか。これぞアメリカン・イノセンスの魔法、ミシシッピ川の夜明けの描写に痺れよう。カルピス劇場でハックやトムに出会わなかった世代には新訳『トム・ソーヤーの冒険』（新潮文庫）という絶好の入り口も。（森慎一郎）

『ヘミングウェイ全短編』

アーネスト・ヘミングウェイ；高見浩訳（新潮文庫（全３冊））

20 世紀に隆盛を極めた「短編小説」はアメリカ文学が自慢できる唯一のジャンルだが、そこに

ヘミングウェイが及ぼした影響は測り知れない（師匠にあたるアンダソンの『ワインズバーグ、オハイオ』もお薦め）。その鋭利な文体、独特のリズムを味わうには、できれば原語で。長編なら『日はまた昇る』がいい。（森慎一郎）

『グレート・ギャツビー』
F・スコット・フィッツジェラルド ； 野崎孝訳　　（新潮文庫）
　いきなり期待しすぎて読むとメロドラマかと肩透かしを食らう。これがときに「完璧な小説」とも称される所以を知るには、小説という読み物のからくりをよくよく知ること。おじさん世代は野崎訳で育ったが、ヒロインの蓮っ葉口調が気になる若い読者は中公の村上訳を。作品愛に裏打ちされた玄人の訳業だ。（森慎一郎）

『響きと怒り』
ウィリアム・フォークナー ； 高橋正雄訳　　（講談社文芸文庫）
　小説には、頭をすっきりさせてくれるものと、頭をごちゃごちゃにしてくれるものとの二種類がある。フォークナーの小説は後者の代表格。『響きと怒り』は、最初のうちさっぱりわけがわからなくても、とにかく最後まで読み通すこと。そして余力があれば、もう一度最初から読み直すこと。（若島正）

『アメリカの息子』
リチャード・ライト ； 橋本福夫訳　　（ハヤカワ文庫）
　最近はさほど読まれないが、かつては黒人文学の金字塔であった作品。そして、ぼくが大学一回生のときに、生まれて初めて英語で最後まで読み切った小説でもある。この小説のせいで、今ぼくはこんな商売をしている。あなたがもしこの小説を読んで、将来どうなろうとも責任を持たないからそのつもりで。（若島正）

『ナイン・ストーリーズ』
J・D・サリンジャー ； 野崎孝訳　　（新潮文庫）
　サリンジャーはとんでもないテクニシャンである。有名な『ライ麦畑でつかまえて』にしても、芸達者なじいさんが少年に化けたようないやらしさがある。短篇集『ナイン・ストーリーズ』では、なにをさておいても傑作「バナナフィッシュにうってつけの日」を読もう。それこそ憎たらしいほどの超絶技巧だ。（若島正）

『遠い声遠い部屋』
トルーマン・カポーティ ； 河野一郎訳　　（新潮文庫）
　カポーティの栄光に包まれたデビュー作。彼がこれを書いたのは、あなたとほぼ同じくらいの年齢だった。あなたがもし小説を書いたとして、この『遠い声遠い部屋』みたいなものが書けるかどうか、考えてみてほしい。そして、カポーティの才能に思いっきり嫉妬してほしい。（若島正）

『キャッチ＝22』

ジョゼフ・ヘラー ; 飛田茂雄訳　　（ハヤカワ文庫）

おかしなおかしな戦争小説。戦争の不条理さをこれくらいグロテスクな喜劇として書いた小説はない。冒頭から次々と繰り出される珍妙なキャラクターたちとエピソードには、どんな読者も唖然とさせられるはず。おおまじめな戦争小説は世の中に掃いて捨てるほどあるので、そういうものと読み比べてみること。（若島正）

『セバスチャン・ナイトの真実の生涯』

ウラジーミル・ナボコフ ; 富士川義之訳　　（講談社文芸文庫）

ぼくが初めて読んだナボコフの小説がこれ。そして、これを皮切りにしてナボコフをすべて読み尽くしたせいで、小説の読み方が決定的に変わり、世界観も変わってしまった。もうぼくの世界はすっかりナボコフ色に染まっている。有名な『ロリータ』を読むのは、この『セバスチャン・ナイト』を読んでからにしてくれ。（若島正）

『ガルガンチュア物語 : パンタグリュエル物語』

フランソワ・ラブレー ; 宮下志郎訳　　（ちくま文庫（全 5 冊））

中世の騎士道物語のパロディーや民間伝承を取り入れつつ、巨人王とその従者の奇想天外な物語の中に猥談、糞尿譚や宗教、政治、人生、結婚などに関する議論や諷刺が散りばめられ、豪快な笑いと深遠な思索が混在している。解釈の可能性の尽きない、重層的な作品である。（増田真）

『エセー』

ミシェル・ド・モンテーニュ ; 原二郎訳　　（岩波文庫（全 6 冊））

言うまでもなく、エセーというジャンルのもとになった作品。身近なことがらについての随想というより、古代の思想家へのコメントをまじえつつ、政治、宗教、人生など、自己と人間全般についての思索集である。思考と知識の限界を求めて、争乱の時代を真摯に生きた人の精神の軌跡ともいえる。（増田真）

『クレーヴの奥方』

ラファイエット夫人 ; 生島遼一訳　　（岩波文庫）

フランス近代小説の源泉の一つとされる作品で、十六世紀フランスの貴族社会を舞台に、道ならぬ恋と道徳のはざまで悩む女性が主人公。恋愛に関してすべてが許されるかに見える現代では、ヒロインの態度は理解されにくいかも知れないが、禁じられた思いによる悲劇性と緻密な心理描写が魅力。（増田真）

『フェードル ／ アンドロマック』

ジャン・ラシーヌ ; 渡辺守章訳　　（岩波文庫）

十七世紀の古典悲劇を代表する作品。エウリピデスやセネカの作品を踏襲し王侯貴族の許されざる恋を題材としつつ、端正な構成の中に人間の情念の激しさと運命の苛酷さを凝縮して観客の心を揺さぶる。原文で詩句の美しい響きを味わえるようになると、作品の魅力がいっそう感じられる。（増田真）

『人間不平等起源論』
ジャン=ジャック・ルソー ； 小林善彦訳　　（中公文庫）
　ルソー独自の政治思想の出発点ともいえる作品。著者は不平等を糾弾するため、社会の起源についての仮説を提起し、現存する社会の原理を徹底的に再検討する。ルソーが「自然に帰れ」と主張しているものと誤解されるもとになった著作であるが、むしろ壮大な思考実験と見るべきものである。（増田真）

『ダランベールの夢』
ドニ・ディドロ ； 新村猛訳　（岩波文庫）
　ディドロは十八世紀フランスの唯物論・無神論を代表する思想家の一人である。ここでディドロは、友人ダランベールのうわごとやその恋人との会話の形を借りて彼の自然観や人間論を展開している。大胆な思想が詩的なイメージと劇作品のように躍動的な会話で語られる魅力的な作品である。（増田真）

『赤と黒』
スタンダール ； 桑原武夫・生島遼一訳　　（岩波文庫（上・下））
　貧しい青年ジュリアン・ソレルは、ナポレオン没落後，武勲による出世をあきらめ、神学生となり，その才智と美貌により貴族階級に入り込み，野望を抱いて戦い、激しい恋を知る。若々しい情熱，恋愛心理の複雑な葛藤を描き出したフランス心理小説の典型（一八三〇年）。（吉田城）

『ペール・ゴリオ ： パリ物語』
オノレ・ド・バルザック ； 鹿島茂訳　　（藤原書店）
　大志をいだいて王政復古時代のパリに出てきた青年ラスティニャックは，社交界に出入りし、出世をめざす。一方、二人の娘を上流階級に嫁がせたゴリオは，その娘たちに裏切られて貧窮のうちに死す。ラスティニャックは，ゴリオの悲惨な死を通じて、パリの残酷な現実を発見する。壮大な『人間喜劇』の代表作。（吉田城）

『レ・ミゼラブル』
ヴィクトル・ユーゴー ； 西永良成訳　　（ちくま文庫（全5冊））
　ミュージカルや映画で人気の原典。「レ・ミゼラブル」とは「悲惨な人々」という意味だ。超人的な主人公ジャン・ヴァルジャンの波瀾の一生を通じて、フランス民衆の情熱と悲哀、人類社会の進歩をうたう長編小説。休暇に一気に読みたい。原書挿絵多数を収録し、のめりこめる。（吉田城）

『悪の華』
シャルル・ボードレール ； 安藤元雄訳　　（集英社文庫）
　フランス象徴詩の先駆者ボードレールの代表的詩集（一八五七年）。破滅的生涯を送った詩人が、悪を至高の美にまで高めて格調高い詩編にうたう。性愛を扱った部分のゆえに風俗壊乱で起訴され有罪となったが、のちの文学に大きな影響を与えた。諸感覚の照応、都会の近代性など斬新な主題も。（吉田城）

『ボヴァリー夫人』
ギュスターヴ・フローベール ; 伊吹武彦訳　　(岩波文庫(上・下))
一九世紀フランスを代表するレアリスムの作家フローベールの、ある悲劇を描いた代表作(一八五七年)。夢と現実のせめぎあいから不倫に走ったエンマの幸福と絶望。細部の描写や心理の描き方が独特で、味読に耐える。社会に対する作家の皮肉も読みとりたいものだ。できれば『感情教育』も併せて読みたい。(吉田城)

『アルチュール・ランボー詩集』
アルチュール・ランボー ; 宇佐美斉訳　　(ちくま文庫)
マラルメ, ヴェルレーヌとならぶフランス象徴派の詩人ランボー。その代表作『地獄の一季節』、言葉の錬金術を駆使した『イリュミナシオン』。その鋭い感受性と強烈な野性、独創的な技巧により、フランス詩の天空に輝いている。わかりやすい注と解説、清新な訳文で味わおう。(吉田城)

『恐るべき子どもたち』
ジャン・コクトー ; 鈴木力衛訳　　(岩波文庫)
コクトー(一八八九―一九六三)は詩人、小説家、映画監督など多彩な顔を持つ言葉の魔術師。ギリシア悲劇のように格調の高い子どもたちの世界。雪の玉で傷ついた少年ポールが, 黒い丸薬で自殺するまで, 幻想的な雰囲気の中に登場する少年少女たちは愛し, 憎み, 宿命を負って死んでゆく。(吉田城)

『ナジャ』
アンドレ・ブルトン ; 巌谷國士訳　　(岩波文庫)
二〇世紀の新しい文学芸術を推進したシュルレアリスム運動の中心人物ブルトンが語る不思議な女性ナジャとの出会い。現実のパリの夜をさまよう「私」の幻想的な語り。狂気にまで迫る愛のかたち。現実と非現実のあいだを彷徨する極北の精神をドキュメントタッチで描く。(吉田城)

『異邦人』
アルベール・カミュ ; 窪田啓作訳　　(新潮文庫)
主人公ムルソーは、旧アルジェリア植民地で働く青年。母の死の翌日、恋人と海水浴に行き、映画を見る。友人の女出入りに関係してアラブ人を殺害し、動機について「太陽のせい」と答える。判決は死刑。いわゆる不条理の認識を淡々とした文体でつづる。カミュ文学の原点を示す作品だ。(吉田城)

『東方綺譚』
マルグリット・ユルスナール ; 多田智満子訳　　(白水Uブックス)
現代作家ながら、優雅な古典的文体で知られるユルスナールの一風変ったオリエントものの短篇集。古代中国の道教の寓話、中世バルカン半島のバラード、ヒンドゥー教の神話、昔のギリシアの言い伝えと事件、そして源氏物語。奔放な想像力を駆使した珠玉の九篇で文学の楽しさを味わおう。(吉田城)

『神曲』
ダンテ ; 平川祐弘訳　　（河出書房新社）
　中世文学の集大成であると同時にその後のイタリア文学の源泉ともなった、いまさら説明の要もない真の古典。現代にいたるまで、ダンテを知らずに（あるいは無視して）作品を書いた詩人も作家もイタリアには存在しない。岩波文庫版をはじめとしていくつもの翻訳があるが、ここでは読みやすさを重視して平川訳を推す。（天野恵）

『わが秘密』
フランチェスコ・ペトラルカ ; 近藤恒一訳　　（岩波文庫）
　ダンテ、ボッカッチョと並ぶ三大文豪のひとりペトラルカ。代表作は『カンツォニエーレ』であるが、定型の抒情詩というその性格ゆえに、翻訳によって失われる部分があまりにも大きいことから、ここではあえて、「最初のルネサンス人」としての彼の人間像をあますところなく伝えるこのラテン語作品を挙げる。（天野恵）

『デカメロン』
ジョヴァンニ・ボッカッチョ ; 柏熊達生訳　　（ちくま文庫（全３冊））
　短編小説集という成り立ちのみならずその内容においても、古典文学についてまわりがちな、いかめしいイメージのまったく感じられない、実に親しみやすい作品である。散文であるだけに翻訳によってもその楽しさ、美しさは十分に鑑賞することができるうえ、中世末期のイタリア都市社会の人間模様を知るにも好適。（天野恵）

『狂えるオルランド』
ルドヴィーコ・アリオスト ; 脇功訳　　（名古屋大学出版会）
　『ロランの歌』の主人公オルランドほか中世フランス武勲詩の英雄たちが、天馬を駆って大航海時代の世界をところせましと暴れまわる。古代文明に目覚め、洗練を極めた十六世紀北イタリアの宮廷文化が生み出した騎士物語文学の最高傑作。定型詩ではあるが、ストーリーだけを追って楽しむことも十分に可能。（天野恵）

『君主論』
ニコロ・マキアヴェリ ; 池田廉訳　　（中公文庫）
　「目的のために手段は正当化される」、「愛されるよりも恐れられる方が好ましい」など、マキアヴェリズムの語源ともなったマキアヴェリ。フランスやスペインが国家統一を成し遂げて主権国家へと成長していく中、存亡をかけて権謀術数の限りを尽くすイタリア都市国家を内側から分析して政治学の誕生を標した作品。（天野恵）

『愛神の戯れ ： 牧歌劇アミンタ』

トルクァート・タッソ ； 鷲平京子訳　　（岩波文庫）

宮廷という極度に都会的かつ人工的な世界に生きていたアンシャン・レジームのヨーロッパ上流階級。彼らは理想化された田園の中で展開するニンフや羊飼いたちの清らかな恋をテーマとする牧歌劇に飽くことなく魅了されつづけた。イタリア・ルネサンスの放つ最後の光芒に包まれて活躍した天才宮廷詩人タッソの佳作。（天野恵）

『抜け目のない未亡人』

カルロ・ゴルドーニ ； 平川祐弘訳　　（岩波文庫）

舞台は十八世紀の国際都市ヴェネツィア。フランス、イギリス、スペイン、イタリアの男たちが、若くて賢い未亡人ロザウラを見初めて求婚する。さあ、彼女はどのような方法で求婚者たちの心を試し、最後に誰を選ぶのか。ロザウラの巧妙なテストによって求婚者たちの少々滑稽な国民性が炙り出され、観者の笑いを誘う。（齋藤泰弘）

『いいなづけ』

アレッサンドロ・マンゾーニ ； 平川祐弘訳　　（河出書房新社）

詩人レオパルディと並んで一九世紀のイタリア文学を代表する文豪マンゾーニの代表作。十七世紀の北イタリアを舞台とする長編歴史小説であるが、徹底した実証主義精神や真摯なカトリック的価値観に裏うちされ、ロマン主義時代に数多く誕生した中世を舞台とする同種の諸作品とは、その深みにおいて明確に一線を画す。（天野恵）

『カヴァレリーア・ルスティカーナ　他 11 編』

ジョヴァンニ・ヴェルガ ； 河島英昭訳 （岩波文庫）

自然主義の影響下にヴェリズムと呼ばれるイタリア独特の作風を展開したシチリア出身の作家ヴェルガの短編集。表題作はマスカーニのオペラの原作としてもよく知られている。国家統一以後のイタリア社会の抱えた矛盾の犠牲者となったシチリア島下層民の生活をヴェリズムならではのタッチで描き出す。（天野恵）

『ピランデッロ戯曲集』

ルイージ・ピランデッロ ； 白澤定雄訳 （新水社（全 2 冊））

演劇の虚構性を舞台上で暴露することによって、イプセン以降の近代演劇に革命をもたらした傑作『作者を探す六人の登場人物』をはじめ、アイデンティティの所在、人格の分裂、他者との言葉によるコミュニケーションの不可能など、現代に生きる個人の孤独を表現した、ノーベル文学賞受賞作家の珠玉の戯曲集。（齋藤泰弘）

『ある家族の会話』

ナタリーア・ギンズブルク ； 須賀敦子訳　　（白水Uブックス）

迫り来るファシズムの影の中、個性豊かに生きるユダヤ系知識人一家を描いた自伝的作品。戦後のイ

タリアを担った著名人たちの青年時代の日常が織り込まれているのも魅力のひとつ。イタリア文学には珍しく極めて平易な文体で書かれており、初級イタリア語をマスターしたら是非原文にも挑戦してもらいたい。（天野恵）

『山猫』
トマージ・ディ・ランペドゥーサ ； 小林惺訳　　（岩波文庫）
　ガリバルディの上陸により混乱をきわめる十九世紀半ばのシチリア、社会の変動に乗じて新興階級が台頭する一方で、旧来の貴族は衰退を余儀なくされていた。このイタリア統一のうねりのなかで、破滅を予感しつつも超然と運命を受け入れるドン・ファブリーツィオの生涯を描いた傑作。作者ランペドゥーサが貴族の曽祖父をモデルに書き上げたこの小説は、ヴィスコンティによって映画化もされている。（村瀬有司）

『無関心な人々』
アルベルト・モラーヴィア ； 河島英昭訳　　（岩波文庫（上・下））
　第一次大戦後の混乱やそれに乗じたファシズムの台頭や、社会に広く充満していた不安や絶望を背景に、ローマのブルジョワジーを覆っていた憂愁と頽廃、モラルの低下をリアリスティックな筆致で描写して全欧的に関心を集めた作品。二十世紀イタリアを代表し、作品の多数が和訳されている作家の処女作にして代表作。（齋藤泰弘）

『薔薇の名前』
ウンベルト・エーコ ； 河島英昭訳　　（東京創元社（全 2 冊））
　記号論学者として有名であったエーコが、1980 年、五十歳を前にして初めて発表した小説。世界的ベストセラーとなった。十四世紀の修道院で次々と起こる殺人事件の謎解きを中心に、当時の思想・風俗を博識に描き、そこに現代社会への風刺も込めている。関連本も多く出版され、1986 年には映画化された。（齋藤泰弘）

『人形の家』
ヘンリック・イプセン ； 原千代海訳　　（岩波文庫）
　彼女を人形のように可愛がってきた夫のエゴイズムと自己保身を目の当たりにし、家と子供たちを捨てて自立の道を探るノーラを通じて女性の人間としての自立を描く。19 世紀末の夫権制社会に対する批判を明らかにしたこの問題作は、今なお、近代劇の代表作としての地位を失っていない。（廣田篤彦）

『ドン・キホーテ』
ミゲル・デ・セルバンテス ； 牛島信明訳　　（岩波文庫（全 6 冊））
　小説を読みすぎるとどうなるか、というのを世界でいちばん先にネタにしてしまった小説。主人公をはじめとして、サンチョ・パンサ、ロシナンテ、ドゥルシネーア姫といったキャラクターくらいしか知らなかったら、ぜひ一度読んでみること。想像もしなかったような奇抜な展開に驚くことうけあい。（若島正）

『伝奇集』

ホルヘ・ルイス・ボルヘス ; 鼓直訳　（岩波文庫）

アルゼンチンが生んだ、二〇世紀最大の短篇作家。ボルヘスの小宇宙はいわば胡桃の中の世界であり、そこには目もくらむような空間が広がっている。代表作の一つが「トレーン、ウクバール、オルビス・テルティウス」で、この魔法の呪文のような題名を見ただけでも読んでみたくなりませんか？（若島正）

『族長の秋』

ガブリエル・ガルシア＝マルケス ; 鼓直訳　（集英社文庫）

マルケスは『百年の孤独』でラテン・アメリカ文学ブームのきっかけを作った作家。もちろんそれも必読なのだが、ぼくはこの『族長の秋』の方を選びたい。あなたはこの息苦しいまでに濃密な空間に耐えきれるだろうか。ただし、翻訳はあまりおすすめできないので、できることならスペイン語の原書か英訳版でどうぞ。（若島正）

『西洋文学この百冊』執筆者一覧

西洋古典学
　中務　哲郎　（名誉教授）
　高橋　宏幸　（教授）
スラブ語学スラブ文学
　佐藤　昭裕　（名誉教授）
　中村　唯史　（教授）
ドイツ語学ドイツ文学
　西村　雅樹　（名誉教授）
　松村　朋彦　（教授）
　川島　隆　　（准教授）
英語学英米文学
　宮内　弘　　（名誉教授）
　若島　正　　（教授）
　佐々木　徹　（教授）
　廣田　篤彦　（准教授）
　森　慎一郎　（准教授）
フランス語学フランス文学
　吉田　城　　（名誉教授）
　増田　真　　（教授）
イタリア語学イタリア文学
　斉藤　泰弘　（名誉教授）
　天野　恵　　（教授）
　村瀬　有司　（准教授）